

ヒロロまちなか映画館

2026年11月28日(土)
ヒロロ4F 弘前市民文化交流館ホール

○10:00～12:10(開場9:40)

『恋するピアニスト フジコ・ヘミング』

(監督：小松莊一良 / 2024 / 日本 / 119分)



©2024『恋するピアニスト フジコ・ヘミング』フィルムパートナーズ

○13:30～15:40(開場13:10)

『ら・かんぱねら』

(監督：鈴木一美 / 2025 / 日本 / 118分)



©2025『ら・かんぱねら』製作配給委員会 京映アーツ/コチ・プラン・ピクチャーズ

○入場料(入替制) 各回500円
※当日徴収・自由席

○観覧申込み 要事前予約(※各回100席限定。定員に満たない場合は当日可)
2026年11月7日(土)8:30～ 電話・窓口・メールフォームにて受付
※3名様分までお申込み可能
弘前市民文化交流館 0172-35-0154(8:30～21:00)

▽申込みメールフォーム



▽詳細はヒロロスクエアHPにてご確認を



主催・問合せ / 弘前市民文化交流館 0172-35-0154(8:30～21:00)
協力 / NPO法人 harappa

ヒロロまちなか映画館

ヒロロまちなか映画館は3年目を迎えました。今年は「ラ・カンパネラ」競演と題して、フランス・リストの難曲「ラ・カンパネラ」が登場する、ドキュメンタリー映画と劇映画を上映します。

1本目は、2024年4月に亡くなったフジコ・ヘミング(1931-2024)のドキュメンタリー映画『恋するピアニスト フジコ・ヘミング』です。聴覚を失いながら、60代後半で世界的に認められた奇跡のピアニスト、魂のピアニスト、フジコ・ヘミングの名前を聞いたとき、私たちは反射的に「ラ・カンパネラ」の演奏を思い描くのではないのでしょうか。

2本目は、佐賀の海苔養殖漁師が「ラ・カンパネラ」の演奏に挑戦する、実話に基づいた映画『ら・かんぱねら』です。果たして、彼はフジコ・ヘミングのように難曲を弾き切ることができるのでしょうか。そのサスペンスもお楽しみください。

なお、「ラ・カンパネラ」とは、イタリア語で「鐘」の意味です。

① 10:00~12:10

『恋するピアニスト フジコ・ヘミング』 監督：小松莊一良 / 2024 / 日本 / 119分



©2024「恋するピアニスト フジコ・ヘミング」フィルムパートナーズ

小松莊一良監督による『フジコ・ヘミングの時間』(2018年)に続く、フジコ・ヘミングの姿を追ったドキュメンタリーの第2作である。彼女の没後、小松は第3作『フジコ・ヘミング 永遠の音色』(2025年)を作った。

コロナ禍の2020年からの4年間、フジコ・ヘミングの日常と演奏を追った本作で、私たちは、パリ・コンセルヴァトワール劇場での「ラ・カンパネラ」「別れの曲」「月の光」などの演奏を堪能するだけでなく、フジコ・ヘミングの少女時代の秘められた恋、戦時中に疎開した岡山県総社市で練習に使ったピアノとの再会、父や弟との思い出など、彼女の人間性と彼女が送ってきた波乱万丈の人生を目の当たりにする。

② 13:30~15:40

『ら・かんぱねら』 監督：鈴木一美 / 2025 / 日本 / 118分



©2025「ら・かんぱねら」製作配給委員会 京映アーツ/コチ・プラン・ピクチャーズ

佐賀県の有明海で海苔養殖を30年以上続けていた徳田時生は、ある日、リストの難曲「ラ・カンパネラ」を弾こうと思い立ち、独学で難曲の演奏に挑みます。船舶免許を持っている主演の伊原剛志は、漁船の操縦と同様に、ピアノの演奏も自分で行うことにこだわった。吹き替えなしの彼のピアノ演奏シーンは、演技を超えてずぶの素人がピアノ演奏に挑むドキュメンタリーの映画を見ているような錯覚を観客にもたらし。果たして彼は難曲「ラ・カンパネラ」を弾き切ることができるだろうか。

劇中、何度も繰り返される「夢があれば生きられる」というメッセージと、映画の最終盤、妻役の南果歩が流す涙が持つ、それぞれの二重の意味をかみしめたい。